

●マイハート		
◇人をよく知るとのこと	桂福團治……	3
●連載／教育のひろば		
◇命とは生きること	坂東 元……	4
●特集／新学習指導要領を考える		
◇新設された内容の道徳的な意義を考える	新宮弘識……	6
●連載／実践報告＋講評と助言		
◇実践報告：2年生児童と「働くこと」を考える 移行措置資料『わたしたちも しごとを したい』を使って	竹井秀文……	8
◇実践報告：「とくちょう」で3年・個性伸長の学習 移行措置資料『中村選手は中村選手，ぼくはぼく』を使って	加藤宣行……	13
◇講評と助言：現場発の実践情報から共に学ぶ	上杉賢士……	18
●連載／実践 子どもの目が変わる		
◇授業を変えるスパイス Ⅲ	立川修司……	20
●連載／道徳のチカラ		
◇道徳の時間を変える③	土田雄一……	22
●道徳教育の取り組み		
◇豊かな心を育てる道徳指導	三浦貴子・柴田 克……	24
●連載／こころの行方		
◇テレビゲームの悪影響	大倉勇史……	26
●連載／子どもを“思わず”見直したくなる		
◇心に残るひとこと	加藤宣行……	27

本文中の勤務校は平成21年2月1日現在のものです。

●著者プロフィール●

新宮弘識先生▶平成21年度から新しくなる『心のノート』の改善事業に奮闘中。特に、規範意識を含む内容の重点化に関するページをどのように企画するかは悩みが深い。

竹井秀文先生▶今年成人した教え子に出会うことができた。脱サラして教師生活10年。本当にあつという間です。そんな教え子から「先生と遊んだことしか覚えてない。」と言われ、ともに汗を流すことのよさ(働くことのよさ)を実感でき、初心に戻りました。ありがとう教え子たち!! 成人おめでとう!!

加藤宣行先生▶私はこのひと月間で4回、大きな授業提案をします。いつも心がけているのは、公開のための授業ではなく、子どものための授業をすることです。でも、よく考えると授業研究を公開しないという選択はありませんよね。いつもそのジレンマに悩まされます。

上杉賢士先生▶2007年の秋に北欧を訪問して、これまで形成してきた自分の教育観に確信を得た。道徳もまた、集まったメンバーのコミュニケーションを通して創造する営みである。その一部を、本誌の記事を通じて紹介したい。

立川修司先生▶三回の連載を終えホッとしています。「授業を変えるスパイス」のタイトル通り、読者の期待にこたえられたかどうか、ちょっと(かなり?)心配です。読者の皆様のご意見ご感想を聞いてみたいような怖いような……。 (苦笑)

土田雄一先生▶11人の学生の卒論発表会が終わりました。一人一人の成長を実感しています。「よく遊び、よく学び、人の役に立つ」。さまざまな経験を仲間とともにすること、ボランティアで公立学校に2年かかわることが本人の大きな力になります。

三浦貴子先生▶昨年度は、千葉大で長期研修生として道徳の研究をしていました。4月から現場に戻り、5年生の担任をしています。日々、人の生き方について情報収集・資料化をして授業の切り口にしています。子どもたちと保護者の皆さんととことん語り合う道徳授業を目指しています。

柴田 克先生▶卓球部で4校を関東大会に連れて行けたので、ただ今5校目で挑戦中。今までは「卓球の先生」と呼ばれていましたが、最近は「道徳の先生」と呼ばれるようになってきました。でも実際「社会科の先生」なのです。

■「子どもの道徳」へのご意見・ご感想をお寄せください。



人をよく知るといふこと

関西演芸協会 桂 福團治



私が手話落語というものを始めて30年になります。その間には、たくさんの人々とのすばらしい出会いがありました。私が手話を勉強しだしたときです。一人の聴覚障害者の友人ができました。私は、その友人と喫茶店で待ち合わせをしては、会話をしていました。話題はさまざまになります。そうしているうちにだんだんと打ち解け、冗談を言い合ったりする仲にまでなりました。そんなある日のことです。私は、道頓堀角座の舞台に、いつものように上がりました。当時の角座は席数一千を越す巨大劇場です。私の舞台も恥ずかしながら大いに客席が沸いていました。ところがその中で、一人だけまったく笑っていないお客様がいるのです。なぜだろうと、落語をしながらその顔をよく見てみると、なんとその聴覚障害者の友人だったのです。私が角座の舞台上がっているのを聞き、一人で観に来てくれていたのです。私は、手話を使わない普通の落語をやっているわけですから、当然彼にはわかりません。千を越す人が笑っている中で、一人だけ笑っていないというその映像は、私の心に深く刻みつけられました。

次の日、私は彼に、前の日に演じていた落語を手話で説明しました。ところが、友人は話を聞いてもクスリともしません。そのとき初めて私は、音声の言葉と手話の言葉の違いに、はっきりと気づかされたのでした。それからの私は、その友人にいかに笑ってもらえる手話落語を作るかということに明け暮れました。最初はまったく笑わなかった彼が、徐々に笑うようになっていったときのうれしかったこと！ 私が、聴覚障害者の方がほんとうにおもしろいと思う手話落語を作ろうという気持ちをもつようになったのは、彼のおかげなのです。

この友人との出会いは、私にとってもう一つ大きな意義がありました。それは、相手の立場に立って考えるということです。私は、彼が聴覚障害者であることを最初から頭ではわかっていました。しかし、その意味について深く考えたのは、彼が

角座の客席で一人、笑っていなかったときからなのです。当たり前のことですが、彼は私の落語を“聴いた”ことはありません。ほかの漫才も、音楽も、聴いたことはないのです。そう考えたとき、プロの落語家である私が、なんとかして落語を彼にも楽しんでほしいと本気で思えたのです。落語のすばらしさを、彼にも感じてほしい。そう思いました。そのとき、それと同時に恥ずかしいような申しわけないような気持ちにもなりました。なぜかという、彼の生活がどのようなものであるか、本気で考えたことのなかった自分に気づいたからでした。これだけたくさん話もし、仲よくなっていたのに、ほんとうは彼のことをよく見ていなかったのではないか、そんな気持ちがしたのです。

身近な人のことは、皆よく知っていると思いがちです。しかし、ほんとうにどんなことで悩んでいるかということ、真剣に考えてみたことがあるでしょうか。いつもいつも、まわりの人のことを考えてばかりいるわけにはいきません。しかし身近な人が、苦しそうなとき、ため息をついているときぐらひは、「どうしたん？何でも話してや。」と声をかけてあげてください。話を聞いても解決はできないかもしれませんが、そばに立っていてあげるだけで、その人にとって心強い支えとなるでしょう。

明日あなたが学校、職場へ行ったら、隣の席に座っている人を見てください。あなたはその人のことをどれくらい知っているでしょう。名前、年齢、家はどこにある、趣味はこれこれ、彼氏がいる、いない……。しかし、この人がほんとうに悩んでいることを知っているのでしょうか。毎日笑顔で話しかけてくるこの人が、ひょっとして深い悲しみを抱えているかもしれない。頭の片隅にでも、そういったことを置いて他人とかかわることで、優しいおおらかな人間関係ができていくのではないかと思います。

昭和35年、三代目桂春團治に入門、昭和49年に四代目桂福團治を襲名。手話落語を考案し、その普及に貢献。平成11年、文部省芸術祭優秀賞受賞。関西演芸協会会長、日本手話落語協会会長。

— 命とは生きること —

旭山動物園副園長 ^{ばんどう げん} 坂東 元

最近、小学校から高校までたくさんの学校から、「命」をキーワードにして講演をしてほしいという依頼が多くなりました。命の大切さ、このことを否定する人はいないと思います。だけど僕は「命が大切」なのではなくて、「生きること」が大切なのだと感じます。命は誕生したときから死で終わる運命です。治療しようが延命しようが必ず死は訪れます。誕生も死も病院で営まれるようになり、日常ではなく特別なことのようにとらえられがちで、身近で目にする、感じるができなくなっています。命とは、死はだれにでも等しく訪れるのだから、生きているうちは生きるという実にシンプルなものだと思います。

僕たちヒトは、地球上のすべての生き物の中で、ただ一種だけに通用する価値観、ルールを作り上げ、まったく異なる生き方をしています。そしてヒトはすべての生き物の中でいちばんすぐれている生き物なんだとどこかで思っています。その中でただ一種だけが無限とも思える勢いで増え続けているという一面があります。

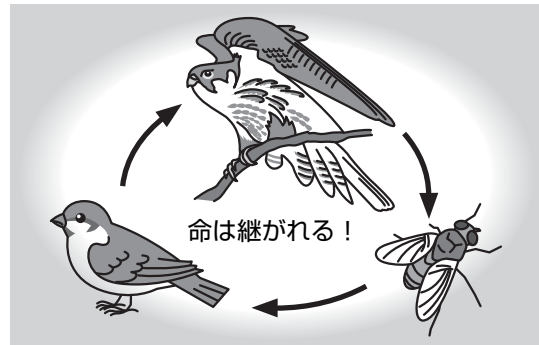
じゃあヒト以外の命はどのように生まれているのだろうか？ 食物連鎖ということばがあります。食物連鎖は命の連鎖、バトンタッチです。死が必ず生に受け継がれ、何一つ無駄になるものはありません。たくさんの死があるからたくさんの命が輝くのです。すべてが循環しているから、何も足さないのに春になると木々が緑に被われ、虫たちや小鳥たちが命を育みます。

例えばスズメのヒナが巣から落ちているのを見つけたとしましょう？ どうにかして助けてあげたいと思います。僕たちにしたら当然の気持ちです。スズメは年に数回繁殖をします。卵から孵ると2～3週間で巣立っていきます。仮に1回に5羽、4回繁殖したとしましょう。みんな無事に大

人になれたらいいね、実際にそうになったらどうなるでしょう？ 数年で空一面がスズメで覆い尽くされてしまいます。でもそうはなっていません。あのか弱い巣立ったスズメたちはどうなっているのでしょうか。北海道にはチゴハヤブサというタカの仲間が繁殖しに渡ってきます。カラスの古巣を巣として使うので、僕たちの生活圏に近い場所で繁殖します。チゴハヤブサはヒナに運ぶ餌として、小鳥を捕まえます。ある研究者がチゴハヤブサのヒナが孵り巣立つまでに何羽の小鳥を捕まえて運ぶのか調査しました。なんと300羽でスズメが圧倒的に多かったのです。ではチゴハヤブサの一人勝ちか、というとそうではありません。チゴハヤブサも死にます。死ぬとウジがわきハエになります。スズメはハエを大量にヒナに運びます。助けないとかわいそうと思うスズメも、死ななければ巡りめぐってスズメ自身が生きてはいけなくなってしまうのです。すべてがめぐるという意味で、生きていることに意味のない生き物なんていないといえます。たとえ毛虫だろうがハエだろうが、すべてです。ハエをだれの命にもかえさないでゴミにしてしまうのはヒトだけです。僕たちは知らず知らずのうちに、命の価値に差をつけています。ハエやカを殺すことに疑問はもちませんよね。ヒトも昔はこの命の連鎖の輪の中にいる自覚をもち、生きていました。命を「いただきます」という気持ちをもっていました。いつからか自分たちだけは違う生き物になり、現在に至っています。分業化が進み全体を理解することが難しくなった時代背景とともに、全体があるから個として生きていて、全体の一部としての個としての存在であることを忘れてしまいました。その中で、個の権利や平等といったことばが切り札のように使われる社会になりました。学校でも子どもの権利、仲よ

く、平等といった切り口から、徒競走で順位をつけない、みんなが桃太郎といった話を聞くようになりました。子どもには仲よく、平等と言いながら現実には、大人の社会では競争やいじめや仲間はずれはありますよね。社会性もち群れをつくり生きる動物は、群れの中でみんなが仲よく横並びという意味で平等に生きているわけではありません。群れの中には上下関係や役割があり、幼いころの遊びの中から、分相應を身につけていきます。群れのリーダーが偉くて、下位の個体が虐げられているということではありません。たとえ相性が悪くてもそれぞれが相手の存在を認め、群れの中で生きています。一頭では生きていけないからです。僕はPTAなどの集まりで呼ばれたときに次のような話をします。

ある年にライオンが4頭の子どもを生んだことがあります。なんと全部雄でした。4頭とも見かけは同じなので区別がつきにくいのですが、性格はずいぶんと違います。よくよく観察するとライオンという種の習性や性質の上に個性があります。寝室に母親といっしょにいるところをのぞくと、すぐにオリ越しに近づいてきて僕を威嚇するやつ、母親の陰から威嚇するやつ、完全に隠れてしまうやつ、さまざまです。餌を食べるときは性格のきかない個体は他の個体を威嚇しながらその場で堂々と食べます。気の弱い個体はおこぼれをくわえて、少し離れた場所で食べます。「こいつらもアフリカにいたら強い雄だけが自分のプライド（群れ）をもてるのだらうな」なんて思います。強いものは生まれ育ったいちばん条件のいいところにとどまります。じゃあ弱いものは？ 生まれ育った近くに執着するもの、まったく知らない新天地に足を踏み入れるもの、自分のプライドをもてずに終わるもの、さまざまでしょう。「やっぱり弱いものはダメなんだ」——そうでしょうか？ 僕は違うんじゃないかと思います。進化あるいは現在繁栄しているということは「強いものが生き残ってきたから」と考えがちです。強いものはそのときの環境の中ではお山の大将です。でも環境が変化したら……強いものは最後の獲物がなくなるまでその場をだれにも渡さないと執着して死んでいくでしょう。ライオンキングじゃないけれどそこにとどまらなかったものが命を引き継いでいきます。事実ほとんど緑のない半砂漠で生き抜



いているライオンがいます。どうしてこんな過酷な環境でとってしまいますが、弱い者が種をつないできた歴史があります。

子犬をもらうときは兄弟をよく見てから選びなさいといわれました。強い子犬は大きくなって自己主張が強くて、周りを従わせる振る舞いをするから飼い方を間違えると飼い主の言うことをまったく聞かない犬になる。気の弱い子犬は、飼い主の感情をよく読んでから自分の行動を決めるので、伴侶動物としてはとてもいい犬になります。

順位をつけない、みなを同じに扱う——それは一位には一位の価値が、六位には六位の価値が個性があることを理解しない大人のエゴなのではないでしょうか、それは子どもの個性を伸ばす芽を、可能性を伸ばす芽をつみ取っていることになるのではないのでしょうか、と話をします。

命は、常に次の代につなぐために存在しています。今を生きるものが今をとりつくりたいだけを考えるようになっては、未来はありません。子どもより、まず大人がしっかりと自信をもたないとダメなのではないでしょうか。喜怒哀楽があり、たくさんの人とかかわりをもってしっかりとコミュニケーションをとれると、生きている実感がわくでしょう。夢を見つけられるでしょう。それが命を大切にすることなのではないでしょうか。

1961年旭川市生まれ。1986年酪農学園大学酪農学部獣医学修士課程卒。同年5月旭川市旭山動物園就職。1995年飼育展示係長、2004年副園長に。平成9年の「こども牧場」から「ちんぱんじー館」「レッサーパンダ舎」「オオカミの森」まで施設のデザインを担当。数々のアイデアを出し具体化してきた。また手書きの情報発信やもぐもぐタイムなどのソフト面でも係の中心となり具体化、システム化を図ってきた。現在は、エゾシカの森の建築を手がけている。著書に『動物と向きあって生きる』（角川書店）、『旭山動物園へようこそ』（二見書房）など。

新設された内容の 道徳的な意義を考える



淑徳大学名誉教授 新宮 弘識

1. 低学年における「働くことのよさを感じて、みんなのために働く」の道徳的意義をどのように考えるか

低学年の内容の前半の文言である「働くことのよさを感じ」とは、どのような道徳的な意味を含んでいるであろうか。

学習指導要領の中学年は、「働くことの大切さを知り」と述べ、高学年では「働くことの意義を理解し」と述べている。小学校最終段階としての高学年の「働くことの意義を理解し」を明確に把握し、それを基に、その基礎になっている低学年の「働くことのよさを感じ」を考えれば低学年の要点が明らかになると思われる。

高学年の「働くことの意義」には、次のようなことが考えられる。

- ① 働くことは、自分や家族の生活を支えるという経済的意義。
- ② 働くことは、何かをつくり出すという文化的生産的意義。
- ③ 働くことは、自分の属する集団や社会を支え、集団の目的に寄与するという社会的意義。
- ④ 働くことによって自分が人間的に成長するという人間的意義。

このことを前提にして、低学年の内容を考えてみよう。

教師は、①②③④の四つの意義を十分に認識して指導に当たる必要があるが、低学年の場合は、「働くことのよさを感じて」「みんなのために働く」ということであるから、③と④の働くよさを中心に指導する必要があるだろう。また、「そのよさを感じる」という文言から考えれば、感覚を通して働くよさを知ったり、理解したりすることが低学年の要点であるということになる。

具体的に考えてみよう。子どもたちは、みんなのために働くという体験は豊かにもっている。家庭内では、食事の配膳・後片づけ・皿ふき・ゴミ捨て・靴磨き・掃除・新聞取り・牛乳取り・お使い等々、「お手伝い」や「受けもった仕事」の別なく、みんなのために働いた体験をもっている。学校においては、係りの仕事・掃除等々、これはお手伝いではなく、みんなで手分けしたうえで自分が受けもった仕事をしている。

このような体験を通して子どもたちの中には、「何かよいことをしている」と感じている者がいるはずである。それは、

- ① お手伝いにしろ受けもった仕事にしろ、働くことみんなが助かり喜んでくれる。だから、褒めてくれたり、ありがとうと言ったりしてくれるということを感じている。
- ② 働くことによってみんなの役に立つと、自分もうれしくなり、また働こうと思うようになるということを感じている。

等々である。このように感じている働くよさをしっかりと認識させることが「働くことのよさを感じて」の文言であろう。

子どもが感じる働くよさは、生活経験の違いによって千差万別である。働くよさを感じている子どももいれば感じていない子どももいるはずである。働くよさを感じている子どもでもその深さには違いがある。そこで学習によってそのよさを共有させ、子ども全員が働くことの意味を低学年なりに明確に認識させることが大切になろう。

このようにして、働くよさが感じ取られ明確に認識されていけば、家族や学級のために働こうとする実践力が高まっていくわけであり、それを文言の後半で「みんなのために働く」と表現したものであると考えられる。

2. 中学年における「自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす」の道徳的意義をどのように考えるか

自信を喪失している子どもたちが増加しているという。その原因は多様であろうが、大人の価値観から子どもを見て他の子どもと比較するという風潮も一因であろう。大人は子どもに期待するところが大きいため、子どもを否定的に見がちになる。また、あれもこれもと多くのことを期待する。ところが、子どもの感性は鋭いから、大人の期待に応えようとして応えられずに自信を喪失するという悪循環が生まれるのであろう。

どんな子どもでも、悪い人間になろうと思っていない者はいない。人間のよさを拡充(拡大と充実・量的な広がり)と質的な深まり)しようとする心や、それを可能にする力をもっているのである。この内容は、そういう心と力をもっている子どもを信頼するところから出発する必要がある。

このことを前提にして、まず文言の前半である「自分の特徴に気付き」について考えてみよう。『大辞泉』(小学館)では、特長と特徴とを明確に区別して示しているが、教育的に見て極めて興味深い。

- ・特長…「この長所を生かす」「○○がこの品の長所だ」のように、他よりもすぐれている点であり、よしあしの判断がなされている。
- ・特徴…「特徴のある声」「あの人はじっくり考える特徴がある」のように、他と違った目立ったしるしであり、よしあしの判断はなされていない。

特長は、磨き上げられた結果、それを他者と比べるとすぐれた人間のよさになっているものをいう。特徴は、目立つしるしがあるが、それが磨かれていないためにすぐれた特長になっていないものをいう。したがって、特徴には、短所も含まれていると考えられるのではないだろうか。

学習指導要領の内容の前半の文言は、「特長」と表現しないで「特徴」としている点に注目しなければならない。

子ども一人ひとりには、特徴をもっている。

具体的に考えてみよう。「すじ道を立てて考えるよりも直観的なとらえ方をする子どもである」「すべてに細やかな子どもである」「作業は遅いが

ていねいな子どもである」「積極的で行動的な子どもである」「作業が敏速な子どもである」「発言は少ないが人の話をじっくり聞く子どもである」等々である。これらは、大人にも当てはまることであるが、見方によればそれが長所にもなり短所にもなるといえる。

特徴は、自分の手によって磨き上げられてはじめてすぐれた長所になるわけであるから、早く自分の特徴に気づいて、それを特長にまで磨きあげていかなければならない。

これは、高学年の個性の伸長につながっていくが、個性をはじめから備わっているものではなく、磨き上げてこそ輝くものになるとするとならえ方が大切であろう。

次に、後半の文言の「よい所を伸ばす」について考えてみよう。

人間はだれでも長所や短所をもっている。自分の短所に注目してそれを改めようとするのも大切ではあるが、中学年ではどうであろうか。本項の冒頭で述べたような自信喪失につながることも考えられる。

中学年では、特徴を磨き上げた結果(過程)としてのよいところ(長所とはいえないにしても)に注目させて、それをさらに伸ばすことによって短所も自然に補われていくという考え方に立って教育することが、この時期の発達課題といえるのではないだろうか。

このような中学年の指導が基礎になって、高学年の「自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす」指導が可能になるのである。

●お知らせ●

光文書院『ゆたかな心』では、新学習指導要領で新設された内容について<平成21年度移行措置>として、次の資料をご採用校にお届けします。

- 1年『わたしにできること』
- 2年『わたしたちもしごとをしたい』
- 3年『中村選手は中村選手、ぼくはぼく』
- 4年『わたしのゆめ』

1・2年は“勤労”，3・4年は“個性伸長”，B5小判4ページ・カラー。「指導のてびき」付きです。

光文書院編集部

2年生児童と「働くこと」を考える

光文書院『ゆたかなこころ』移行措置資料

『わたしたちも しごとをしたい』を使って

岐阜大学教育学部附属小学校教諭 竹井 秀文



1 児童の実態から

低学年の児童の発達段階では、教師に言われて働く、受け身の姿が多く見られる。しかし、「働くこと」への抵抗はなく、楽しく働き、互いに喜び合うことができる姿も多く見られる。

1年生では、家族や先生のお手伝いとしての「仕事」が多い。家族や先生に褒められることを喜びにして、手伝いに進んで取り組む姿が見られる。

2年生になると活動の幅が広がり、校内や学級内でさまざまな仕事をしている。日直、班長や掃除、係活動など多くの仕事を行い、働く経験も豊かである。また、しなければいけない仕事である

当番活動（日直、掃除当番、給食当番）やしたほうがよい仕事である係活動（係活動・児童会活動への参加）など仕事の内容や質に応じて、創造的に働いている姿もたびたび見られるようになる。

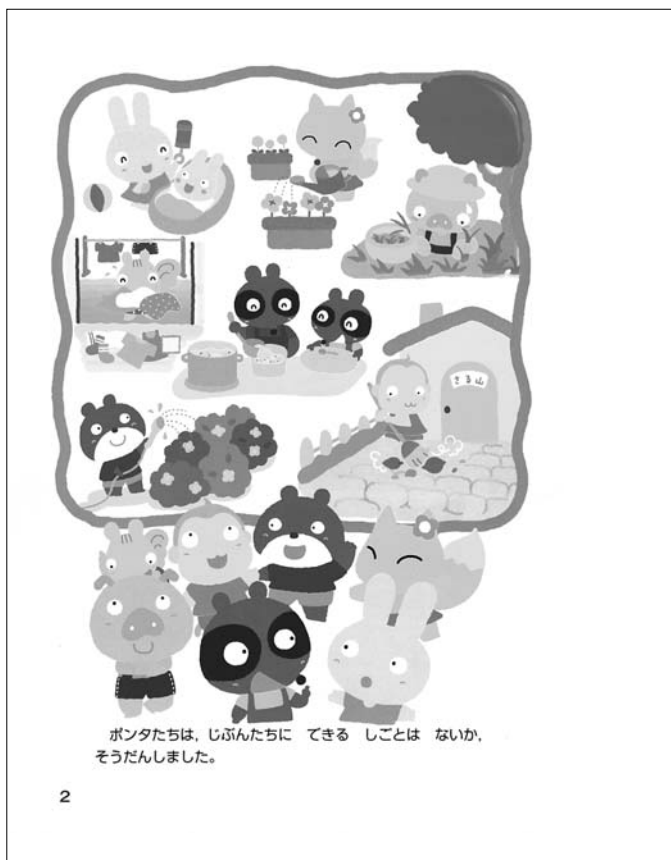
このような2年生の「働く」実態から、

- ・「働くこと」そのものに値打ちがあることを知ること。
 - ・「働くことのよさ」とは何かを考えさせること。
- 以上2点を大切にして実践を進めることにした。

2 指導のねらい

本時のねらいは「働けば、周りの人が喜んでく

▼移行措置資料／2年・勤労



〔資料1〕

主な学習活動	指導の方法
<p>①学級の仕事について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな仕事をもっているか。 ・どんな気持ちで仕事をしているか。 ・「しなければいけない仕事」と「したほうが良い仕事」との違いは何か。 <p>②『わたしたちも しごとをしたい』を読んで話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あらすじを先生から聞く。 ・3ページの絵を見て、町の人々は、何と言って拍手をしているかについて考え、話し合う。 ・4ページの「だって」の続きの□には、どのようなことばを入れるかについて考え、話し合う。 <p>③わたしたちも、ポンタのように考えて仕事をしたことはないかについて話し合う。</p> <p>④働くことについて、自分の考えをまとめて発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○休み時間にどんな仕事をしたのか、どのような仕事があるかを明確にする。 ○「しなければいけない仕事」と「したほうが良い仕事」の違いは何かを考えさせる。 ○違いを比べて考えさせることで、どちらの仕事にも「よさ」があり、その「よさ」が何かを考えさせる。(資料を読む必然を生む。) ○拡大した絵を、順番に提示してどの場面か聞きながら、ていねいに説明する。 ○3ページの絵を示して、褒めてくれている大人の声を考えさせる。 ○全員の子どもが書き上げることができる時間を確保したい。 ○係活動で進んでやった仕事を思い出し、働くことによって、よりよくなった学級の姿を交流させる。 ○「働くって○○だ。」の○○の中にキーワードを作らせ、自分の考えをまとめさせる。

れたり、自分もいい気持ちになったりすることがわかり、係り等の仕事をしっかりしようと思うよ

うになる」とした。具体的には、以下の3点である。
*人のために働いている人を見て、「立派だなあ」



ちょうちょうさんから、
「じぶんたちからはたらきはじめてのは えらかったです。」
と、たくさんのごほうびを いただきました。



ポンタたちは、
「ごほうびを いただかなくても、しごとを つづけたい。」
と いいました。
だって、

という気持ちをもつことができる。

- *人のために働けば、周りの人が喜んでくれるだけでなく、自分もうれしくなることがわかる。
- *人のためになる係りなどの仕事を進んでするようになる。

3 指導案

前ページ【資料1】のように立案した。

4 授業記録（授業終末のみ）

T：これ何をしているの？（4ページ目を見せて）

C：しごと。

T：ごほうびをもらわなくてもしごとをつづけたい。意見のある人いる？

C：ごほうびをもらうために町をきれいにしているんじゃない。

T：ごほうびをもらわなくても、しごとをつづけたって、なんで？

C：町の人をもっとなかよくしたり、町をもっとよりよくしたりするため。

C：もっと人を、もっと町を、もっとみんなを思う気持ちがこうなった。

C：ごほうびをもらわずに、みんなが笑顔になった。

C：みんなの笑顔がごほうびだ。

C：ごほうびをもらわないでも、町の人みんなが笑顔だから。

T：ごほうびもらうことも大事だけどね。

C：ごほうびなくても、みんなが幸せだからいい。

T：この絵見て、だれが幸せそう？

C：みんな。

T：みんなってだれ？

C：町中みんな、自分もうれしい。

C：汗かいているけど、笑顔だから。

T：それが幸せということかな。プリントの□□の中に、「だって」に続くことばを書いてください。

“移行措置資料”4ページの〈ポンタたちは、「ごほうびを いただかなくても、しごとを つづけたい。」と いました。だって、□□〉の□□の中に書かれたことばは次のようなものである。

- ・みんなの笑顔が見られるのが、ごほうびだもん。そして町が明るくなるんだもん。
- ・みんながうれしいから、もっと続けたいんだもん。町中の人をもっと笑顔にしたいんだもん。

・みんなが喜んだり、笑顔になってくれたりしたらうれしい。それがごほうびだもん。

・自分もうれしいし、大人たちもうれしいのが、ごほうびだから。

・みんなの笑顔が見られたら、ぼくたちはそれがとっても幸せだもん。

・みんなの笑顔でよりよい町にしたいんだもん。

・町中をきれいにするとみんなの笑顔が見られるのがうれしいから。働いたのが宝物だよ。

・町中のみんなの笑顔を見られるし、みんなの笑顔が最高のごほうびだから、これからもつづけていきたいし、みんなが気持ちよくすごせるためにつづけたい。

・ごほうびも大切だけど、町の人々の心と町がきれいになったから、その気持ちだけうけとりたい。

・みんなの気持ちも町の人たちも心がきれいに（すっきり）するんだもん。

・ほんとうのごほうびは、みんなの笑顔だからだもん。

・町の人たちの笑顔や幸せが自分たちのほんとうのごほうびだもん。

・みんなのためにも、困っている人や苦しんでいる人たちのためにも、もっともっと町をよりよくするためです。そして、みんなが喜んでくれる笑顔が宝物だもん。

・みんな、とても笑顔だったし、「ありがとう」といってくれたんだもん。

・仲間の幸せを考えていて、他の人の笑顔がごほうびだもん。町中が助かって、みんながうれしかったもん。

・みんなの喜ぶ顔とうれしそうな顔が見たいからだもん。

・みんなの笑顔のために、働きたいんだもん。

5 指導の実際

導入では、児童会から提案されている「銀杏を拾う活動」に、進んで働いている姿を取り上げ、どうして進んで働くことができるのかを考えさせた。活動そのものの値打ちを語りだす子が多く「勤労」という価値に迫る発言はない。しかし、「（銀杏を拾う活動は、）しなくてはいけないのか、しないほうがいいのか、したほうがいいのか」という発問をすると、児童は、口々に「したほうがいい。」とつぶやく。さらに、注目すべきは「係活動と同



じ。」という発言をした。これは、「銀杏を拾う活動」が「したほうがよい仕事」という点で「係活動」と結びつけて考え出した瞬間である。

ほかにどんな仕事があるのかを聞き、「掃除」「給食」などの当番活動や一人一役の仕事や班長などの学級組織について、自分たちが担っている仕事をすべて答えることができた。しかも、しなければいけない仕事、したほうがよい仕事など、分類しながら話し合うことができた。指導案にはない展開になり、とても驚いた。

そこで「しなければいけない仕事」と「したほうがよい仕事」の違いについて発問した。子どもたちは、しなければいけないことは、絶対にやったほうがよいことで、したほうがよいことは、するともっとよりよくなることと発言した。しかし、話し合いを進めていくうちに、何が違うのかわからないというもやもやした雰囲気が学級を包みだした。

このもやもやとした雰囲気こそ、考えようとする意識を生み、資料を読む必然を生む。

このような導入で大切にしたいことは、次の2点である。

- ・ たくさんのお仕事をみんなが担っていること。
 - ・ しなければいけない仕事と、したほうがよい仕事があること（しなくてよい仕事はないこと）。
- どちらも大切であり、「働くことのよさ」があること。

展開では、範読したあとに場面絵を順番に出して、ストーリーをていねいに押さえた。特に、3ページの上の場面を指し、「大人が拍手をして何を言っているのか」と聞いたときは、子どもたちの発言は、とても活発になった。きっと働いて褒められた経験が生かされているからだろう。ここで注目したいのは、子どもたちが「自分たちから

進んで働いたこと」に共感していたことである。「どうして自分たちから進んで働くことができたのか」を聞くことで、進んで働くよさを深める話し合いができた。

4ページのさまざまな場面の絵を見せると、子どもたちは言いたいことがいっぱいあるようで、発問をしていないのに、挙手をしていた。それほど、4ページの絵や文には力がある。「ごほうび」ということばに反応し、次々と「働くことのよさ」を発言していた。導入で、悩んだ「しなければいけない仕事」「したほうがよい仕事」の枠を超えた発言（考えづくり）ができたことを満足した姿が多く見られた。

終末では、「はたらくって〇〇だ。」や「はたらくって〇〇することだ。」などの〇〇の中に自分の考えをまとめて、キーワードを作らせた。今までの仲間の発言や板書などをもとに自分の考えを再構築することができ、全員の子が発言して、授業を終ることができた。

6 子どもたちのノート（2年2組／40人学級）

子どもたちの道徳ノートには、「はたらくって〇〇だ。」の〇〇の中に70近くのことばが書かれた。それらを「働くことの意義」（新宮弘識先生）で分類すると次ページの【資料2】のようになる（「経済的」と「文化的生産的」は少数のためいっしょにした）。

中でも、いつも黙ってもの静かなI君のノートには、〈はたらくって、みんなのよろこびをふくらませ、みんなのために、がんばってやること。そして、人が「ありがとう」と思うようなことをやることだ。〉と書いてあり、実はじっくり考えていたことを知って驚いている。

〔資料2〕

経済的意義・文化的生産的意義	自分の属する集団や社会を支え、集団の目的に寄与するという社会的意義	働くことによって自分が成長するという人間的意義
<ul style="list-style-type: none"> ・生活をよくすることだ。 ・なかまのために考えてつくりだすことだ。 ・みんながわくわくすることだ。 ・笑顔をつくりだすことだ。 ・みんなの喜びがひろがることだ。 ・笑顔と明るさをごほうびにすることだ。 ・みんなの心を動かすことだ。 ・みんなを守ることだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなを喜ばせたいからすることだ。 ・みんなの幸せをふくらませることだ。 ・みんなを笑顔いっぱいにする事だ。 ・みんなの幸せを考えて、よりよくすることだ。 ・みんなのためにがんばることだ。 ・みんなを幸せにすることだ。 ・みんなの気持ちをよくすることだ。 ・自分も人も気持ちが温かくなることだ。 ・元気づけることだ。喜ばせることだ。 ・たくさんの人がかがやき、笑顔がたくさんになる。 ・人のことを思って仕事をする事だ。 ・みんなのことを考えて、自分から進んでやることだ。 ・みんなの笑顔を見られて「ありがとう」といわれるだけでじゅうぶんだ。 ・自分からみんなを思い、人を喜ばせることだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで自分の幸せをいっぱいにする事だ。 ・楽しい。 ・すごいことだ。 ・自分も喜ぶことができる。 ・心を成長させることだ。 ・こんどからもがんばろうと思うことだ。 ・自分のやる気がでること。 ・自分から進んですることだ。 ・みんなの笑顔を思いうかべるだけで働きたくなる。 ・汗をかけばかくほど、笑顔になることだ。 ・やれることを考える。

7 考察(まとめ)

下の記事は授業後に子どもが書いてきたものである。この日記からもわかるように、「はたらく」ことについての自分の考えやこれからどう生きていけばよいのかを見つめることができている。ねらいもほぼ達成しているようにも思う。

また、この実践後に児童会から「落ち葉拾いをしてほしい」とお願いがあった。休み時間になる

はたらくって、どういこと
 今日、「わたしたちもしごとをしたい」です。
 このしりようでは、「はたらく」ということを
 考えました。
 そして、最後のプリントにこう書きました。
 「はたらくって、なかまのしあわせをふくらませ
 ることだ。」
 と書きました。
 もし、しりようの中にあつたように、ポンタた
 ちのように町中の人ともっとよくしたりすること
 が、自分でできたらすごいなと思います。
 しりように出てきたポンタたちのように、たく
 さんやくに立つことをしていききたいです。

と、落ち葉拾いをする姿が見られ、進んで働くよさを感じながら活動していた。

「落ち葉拾い」をすることで、学校をよりよくしている実感や高学年の子や全校の子が喜んでくれるという「よさ」を感じつつ、「みんなのために働く」ことを実践に結びつけていることが次の写真でもわかる(真剣で楽しそうに働いている)。



今回、「働く」ということを2年生の児童と考えたが、その価値に対する深い考えは想像をはるかに超えていた。みんなのために働くことを楽しく感じている低学年の発達段階だからこそ、「勤労」という価値について学ぶ必要があることを感じた。授業をする前と後の姿の変容に驚きながら、この実践を締めくりたい。

「とくちょう」で3年・個性伸長の学習

光文書院『ゆたかな心』移行措置資料

『中村選手は中村選手，ぼくはぼく』を使って

筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行



1. はじめに

今回は、学習指導要領改訂により、新たに3、4年生に加えられることになった「1-(5)自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす」という内容項目に対して、「中村俊輔」という人物を取り上げて新たな資料を開発し、担任する3学年で授業を行った。

本学級の児童はサッカーを習っている子どもも多く、開始早々、多様な反応が見られた。また、サッカーには興味のない子どもでも、時代を象徴する人物として身近に感じたのか、自分と重ねて資料を読む姿を見ることができた。私の学級は、道徳ノートを用意し、日ごろから板書のなかの大切だと思った部分や授業後の感想などを書くようにしているが、ある児童はふだんは半ページほどしか書かないが、この日に限っては4ページも書いて翌日提出してきた。このことから、子どもたちがいかに興味・関心をもって学習を進めたかの一端を伺い知ることができよう。

2. 主な展開（傍点筆者）

T：自分のよいところ、そうでないところ、自分らしいところって言えますか。

C1：自分らしさっていうのは、自分にしかもっていない、顔立ちとかそういうもの。

C2：性格、とくちょう。

T：こういうのを全部ひっくるめて「とくちょう」と言うのですね。

C3：自分のとくちょうをもっとよくする。「とくちょうを生かす」だ。

（「とくちょうを生かす」と板書）

T：「とくちょうを生かす」って何だろう、と考えながら、資料を読んでいきましょう。

（資料を配布し、読む）

C4：中村選手と中村君は同じところと違うところがある。

T：中村選手と中村君の違うところと同じところってどこですか。

C5：心かな。とくちょうも違うよ。夢も違うけれど、同じところもある。

C6：この二人は夢は違うけれどつながってる。

T：ということは、サッカーが好きで、中村選手みたいにやっていたら、「ぼく」も中村選手のようにMVPになれる。みんな中村選手になれるということだ。

C7：違う。なれないわけじゃないけれど、努力しだいで中村選手みたいになれるし、自分らしいほかの姿になる。

C8：自分らしいほかの姿っていうのが、自分らしさ＝「とくちょう」なんだ。

C9：中村選手は中村選手なんだし、「ぼく」は「ぼく」なんだから、「ぼく」もその自分らしさ、特技とかを伸ばして、自分のサッカーをやっていたらいいと思う。

T：C9君が言った、「自分のサッカーをやっていたらいい」というのはどういうことですか。

C10：それが自分らしさってところで、同じサッカーでも、スタイルが違ってあたりまえ。たまたまサッカーだったんじゃないかな。ほかのものにも当てはめられる。

C11：水泳とか。（「北島康介」とか「野球のイチロー」とか「なわとび」などの声があがる）

T：ということは、これは「ぼく」だけの話じゃなくて、「わたし」の話でもあるんだ。

C12：だからだれにでも「とくちょう」はある。

C13：中村選手は中村選手で、中村選手にしかできないことがあるし、「ぼく」は「ぼく」にしかできないことがあるから、自分らしいほかの姿がある。

T：自分にしかできないことがあるだろうと。なるほど。

C14：だから「ぼく」は中村選手よりも上になる

かもしれない。

T：ほお、そう考えたら、なんかすごいねえ。

C15：自分にしかできないことっていうのは、希望。希望があるから自分にしかできないことがあって、自分にしかできないことがあるから、自分らしいほかの姿がある。

T：なるほど。自分にしかできないことを一生懸命やっている、その自分らしい姿は、中村選手のMVPとは違う。もっとすごいものもっているかもしれないんだ。中村選手と「ぼく」の同じところと違うところがだいぶ見えてきましたね。

C16：中村選手には中村選手の山があったでしょ。それで、「ぼく」には「ぼく」の山がまだあると思う。

T：みんな山があるっていうところは、その山はみんな違うけれど、だれにも山があって乗り越えていくってことはいっしょだってことか。夢も希望も違っていいんだ。でもみんな夢や希望をもって自分らしくやっていくと、何か

がかなうということはいっしょなんだ。

T：なるほど。いいところは伸ばす。悪い苦手なところは少しずつ努力すると、どうなる？

C17：そうすると、上手になるし、「もっとがんばるぞ！」という気持ちになってがんばってゆとりができる。

T：今日はね、「とくちょう」って何だろうということを考えてきました。もう一回聞かよ。自分の「とくちょうを生かす」ってどういうことですか。

C18：今もっている自分の力をバネにして、いっぱい練習してもっと高いところに行くこと。

C19：自分を信じて、自分だけの道を行く。

C20：自分がしたいと思った、ほんとうの自分に近づく。

T：ほんとうの自分に近づく。うそじゃなくてね。なるほど。ほんとうの自分を見つけて、ほんとうの自分の生き方、自分だけの生き方をしたいですね。私もみなさんの意見を聞いていてそう思いました。

▼移行措置資料／3年・個性伸長

3年

とくちょうを生かす

中村選手は中村選手、ぼくはぼく

ぼくの名前は中村俊介です。サッカーで有名な中村俊輔選手と漢字はちがうけれど同じ名前です。

学生のころサッカー部に入っていたおとうさんのすすめでぼくもサッカーをするようになり、今では地元のチームでレギュラーとしてゲームに出られるようになりました。相手をドリブルでかわし、思いきりゴールをきめたときは、とてもいい気持ちです。



写真提供 / Atsushi Tomura / アフロススポーツ

サッカーは大ですけど、ひとつだけいやなことがあります。それは、中村選手とくらべられてしまうことです。この間も、こんなことがありました。

思いきりうったぼくのシュートがゴールポストをはずれてしまったときです。

「中村俊輔だったら、すばらしいループシュートでゴールをきめているところだぞ。まだまだだな。」

「中村俊介なんて、りっぱな名前をもっているのだから、もっとがんばらないとね。」

と言われてしまいました。



また、こんなこともありました。ぼくは、3年生のチームメートの背がひくいのです。ゴール前のせり合いで体の大きな相手におし負けてしまい、ボールをとられてしまいました。

背がひくいのがかやしいと思いました。それを見ていたおかあさんが、

「中村選手だって、中学生のころは背がひくくて、くろうしたそうよ。でも、人一倍がんばって、それをのりこえたんだって。あなたもやればできるわよ。」

と、なぐさめてくれました。

(そんなこと言っただって、中村選手と同じことができるわけがない。人一倍がんばったというけれど、背がのびるわけではないし、何をどうがんばればいいのか。ぼくだって背が高くなればいいのか。と思うけれど、何から何まで中村選手と同じだったらいいというわけでもないだろう。)と思いました。

そのようなことがつづき、サッカーがいやになることもありました。おかあさんのことばをよく考えてみると、中村選手にはどんなくろやうががんばりがあったのだろうと思うようになりました。

ぼくは図書館で中村選手ののことをしらべてみました。JリーグでのMVPやたくさんの最優秀選手賞を手にしたすばらしいせいきをもつ中村選手ですが、いつもうまくいっていたわけではなかったようです。



3. 3つの観点からの検証

では、道徳ノート、日記の感想や気づきなどの子どもたちの反応を見ながら、次の3点について授業の検証をしていきたい。

- ①この内容項目、資料は、道徳の時間としてどのような意義があるか
- ②この資料の中学年における「1-(5)個性伸

中村選手は4人兄弟の末子として神奈川県に生まれました。サッカーとの出会いは早く、わずか4才のときのことで。小学校のころは、いつも「一つ年上」の人たちとれんしゅうにあげられ、わきをみがいていったそう。中学に入ったころのジュニアユースチームでもかがやいていました。「ボールをあつかうことにかんしては、同級生のだれよりもよかった」そう。しかし、中学2年生になると、めっきり目立たなくなりました。なぜかという、身長がまるでのびなかったからなのです。いちどめいたと思っても、次のしゅんかんにはボールをうばわれてしまったり、やすやすとふきとばされてしまったり……。ところが、高校に入り、みるみるうちに身長が20cmものび、遠くも見えるようになり、ちょっとしたことではボールもとられることがなくなりました。そこから中村選手のかいしんげきがはじまりました。

このようなジュニアユースチームでのぎせつや、高校サッカー界へのちようせんをもとに、ワンランク上の人たちとプレーすることやいろいろな世界にとびこんでいってしげきをつけることの大切さをまなびていったのでした。さらにもうひとつ、中村選手をささえているものがあつたそう。それは、「自分をしんじきつた」ということ。

「テクニクばかりみがいていた。体格ではかなわないうから、ぎやくにそつちにかを入っていた。今思えば、それはよかつたと思う。身長がのびてから、それまでやってきたことが生きてきたから。」

ながしたあせはむくわれる。体が小さくてやっていたけるのかというしんばいをはねのけて、自分のやってきたこと、きめたことをしんじることができた。かれをささえているのは、技術的なことよりも、逆境に強い、その精神力にあるのかもしれない。

【ブライド 中村俊輔】(藤沼正明「ソニー」マガジンス p.87～99)



写真提供：アフロ

というようなことが書かれていました。ぼくはこの本を読みながら、中村選手の強さは、テクニクが上手とか、背がのびたとかいう、もって生まれた才能ではなく、自分の力やとくちょうをよく考えてれんしゅうをつづけてきたことでそだててきた、自分をしんじる気持ちなのだと思いました。今まで中村選手のようにできるかできないかということを気にしておちこんだり、サッカーのれんしゅうをさぼろうと思ったりしたことははずかしく思いました。中村選手は中村選手、ぼくはぼくです。ちがうところがあつた当たり前です。ぼくはぼくのプレースタイルを見つけていけばいいのです。

でも、同じところもあります。それは、中村選手も体が小さかつたけれども、サッカーがすきて、自分のとくちょうを大切にしながらがんばってきたところです。ぼくにもできる。そのヒントを中村選手がくれたように思いました。

長」の道徳資料としての妥当性

③道徳教育としてどのような展開が可能となるか

①道徳の時間としての意義

ぼくは中村選手が自分を信じたから MVP にかがやいたんだと思います。中村選手はまだ先を目指しているのではないかと思いました。中村選手とぼくはちがうと思います。それは、目指す道がちがうし、わざもちがうからです。とくちょうもちがいます。例えば、ぼくのクラスには「あいりちゃん」が二人いますが、それぞれにいいところをもっていて、自分なりにがんばっているんだなと思いました。前に道徳の授業で学習した金子みすゞさんの「わたしが両手を広げても」という詩の、「みんなちがってみんないい」の意味は、そういう意味だったんだなと思いました。(男子)

クラスメイトの同名の友達のことや、過去に学習した教材の内容を連想し、そこに同じ本質を見いだしている。道徳の授業で、資料を通して本質を学ぶことができれば、それは容易に自己の生活に転移するということを物語っているように感じる。

「とくちょうを生かす」ということばは、授業の冒頭で子どもたちから出された。曰く、「何となく知っていた」「聞いたことがある」レベルの理解である。この場面では、「特徴」と「特長」の明確な定義づけはしなかった。ただ、「とくちょうにはいい面と悪い面がある」ということを子どもたちの発言の中から押さえたうえで、「特徴とは何だろう」という問題意識をもちながら授業を展開したのである。その結果、子どもたちは自分の「とくちょう」について「もっと知りたい」という興味・関心を持ち、「とくちょうを伸ばして自分なりの道を歩んでいきたい」という意欲・



方向づけを自らすることができた。「自分の特徴に気づき、よい所を伸ばす」という、中学年に新たに設定された本時のねらいは、ある程度達成されたと考えられる。

②道徳資料としての妥当性

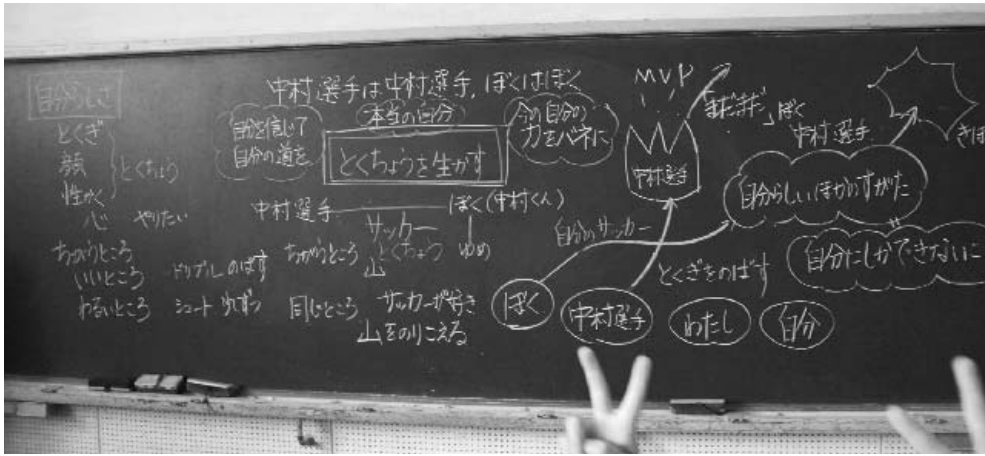
中村選手には中村選手の、中村君には中村君の道があると思います。中村君は、中村選手と同じところとちがうところがあります。同じところは、サッカーが好き、でも身長が低いところ。ちがうところは「とくちょう」です。自分らしさがちがうのです。中村選手のようにならなければいけないなんてことはないから、目標をもって自分の道を歩んで行けば、もしかしたら思っていた夢はかなわないかもしれないけれど、何かよいことがあるはずだと思います。「とくいなこと」、例えば私はなわとびが得意ですが、その得意ななわとびを続けていけば、運動会のなわとび大会などで優勝できるという感じです。(女子)

この児童の意見文から伺えるように、資料から「自分なりの道を歩む」「とくちょうを伸ばす」などの、ねらいに絡むキーワードを導き出すことができています。資料から学ぶというスタンスにおいても、資料を通して学ぶという観点からも、この資料はねらい設定に対して有効であると考えられる。

③道徳教育としての意義

日記は、日ごろの日常生活の体験や思いを自由につづることに使っており、子どもたちは毎日思い思いのことを書いて、提出する。担任はそれを読み、コメントを加え、必要に応じて学級通信等で取り上げ、学級や家庭に伝えている。それによって、例えば道徳の時間に学習したことがどのような形で子どもたちの心に残り、家庭や地域での活動に発展していつているかを知ることができる。今回の授業後の児童の日記から、子どもたちの意識の流れを確かめてみたい。

今日、「とくちょう」のことについて話し合いました。私は授業をしているうちに、自分のとくちょうを知りたくなりました。そして、家でお母さんに聞きました。



人から見た 私のとくちょう	<ul style="list-style-type: none"> ・明るい ・何にでも一生懸命 ・人にやさしくできる
私が見た 私のとくちょう	<ul style="list-style-type: none"> ・すぐころんでけがをする ・行動がはげしすぎる

私はこれを見て、「人からと、自分からはちがうなあ」と思いました。

あともう一つきもんを授業中にもちました。それは、「ほんとうの自分って何？」です。そこでお母さんと話し合いました。結論は、「だれにもわからない。自分が見つけないといけないもの」です。このように、授業中にできたきもんをとくことができたのでうれしいです。(女子)

この児童は、授業を通して「自分の特徴は何だろう」という問題意識を芽生えさせ、それをもとに家庭での話し合いにつなげ、最終的にほんとうの自分、自分らしさという、大きなテーマに迫ることができたようである。

今日は「自分らしさ」についてみんなで考えました。ほくはいつも思うのだけれど、もっと上手になりたいとか、もっとがんばりたいと思うとき、まず「自分」とたたかいます。そして、泣きたくてもがんばって乗り越えて、自分に勝つことができたなら、今度は「勝つことができた自分」とたたかいます。こういうほくが自分らしい、とほくは思っています。深く考える授業でした。楽しかったよ。先生、

ありがとう。(男子)

この児童の自分と向き合う姿勢は、「自分の特徴を知り、さらに向上しようとする」という個性伸長の神髄をついているように思われる。「こういうほくが自分らしい」自分だと認め、道徳学習をそういう自分になるための糧として肯定的にとらえている。人からやらされる学習ではなく、自分から主体的に行う学習となっているのである。このような向上心ある姿勢で道徳学習を行う主体は、教育活動全体を通して、また、家庭や地域での実体験も併せて、自ら道徳教育を実践していると言ってよいのではないだろうか。

最後に道徳の授業全体に対する思いが書かれた日記を紹介して、本稿を終えたいと思う。

4時間目に道徳の授業をしました。さいしょはだれも上手ではないけれどそれでいい、ということがわかりました。でも、それよりわかったことがあります。それは、自分には自分しかもっていない才能がある、ということです。そして、その才能をバネにすると、もっと大きな、自分にしかできない夢がかなうのだと思います。私は、いろいろなことがわかるので、道徳が大好きです。(女子)

この日記に、これからの彼女の人生に対する明るい希望を見いだすのは私だけだろうか。

以上、大まかに考察を加えてきた。本学習を通して中学年における「個性伸長」の授業設定の意義や、本資料を使つての展開の有効性がある程度意味づけすることができたのではないかと考えている。

現場発の実践情報から共に学ぶ



千葉大学大学院教授 上杉 賢士

◆はじめに

学習指導要領が改訂され、道徳教育のいっそうの充実が要請された。今回の改訂は、全体としての骨格にそれほど大きな変更は見られないものの、いくつもの注目すべき点がある。とりわけ、小学校低・中・高学年、中学校と区切って重点的に指導すべき事項が示されたことは、子どもの実態に対するネガティブな見方に基づいた改訂作業であったことを物語っているように読める。

はたして、今の子どもたちは多くの問題を抱えているのだろうか。そして、そのような見方に対して教育現場ではどのように対応していけばよいか。今こそ、現場発の実践情報を共有し、道徳教育充実のためのコンソーシアム（共同体）を構築する必要がある。

◆竹井実践に寄せて

竹井さんのレポートは、低学年に新たに加えられた内容項目としての「勤労」の取り扱いに焦点を当てている。そして、レポートの冒頭にも記されているように、低学年の子どもたちは「教師に言われて働く受け身」のように大人の目には映る。

しかし、指導後の道徳ノートに記された「はたらくって□□だ」の□□の部分を集計した結果は興味深い。

多くの子どもが、まず「集団や社会の役に立つため」と記している。そして、「自分が成長するため」という理由が続いている。「経済的・文化的生産的意義」に分類されている内容も、よく吟味すると「集団や社会の役に立つ」に同類のものが多し。

この理由づけの順序は、ボランティアの

野で強調されている勤労の意義の構図そのものである。

すなわち、最初は周囲や社会の役に立ちたいと思ってボランティアに取り組む。その活動を継続していると、いつしか予期しなかった自分への見返りの多さに気づく。最初から見返りを期待する心持ちはボランティアにはなじまないが、人のために思って活動していると、それがいつの間にか自信を生み自分の成長につながることを実感するのである。

欧米でボランティアがごく日常的な活動として根づいている背景には、この両者が不離一体のものとしてとらえられているという事実がある。興味をひかれたのは、入門期にあたる低学年の子どもたちが、働くことに対してすでにこのような感覚をもち合わせていることを発見したからである。

内容項目としての「勤労」が低学年にも位置づけられたのは、「ニート」に代表されるように働くことに距離を置く若者の傾向によるものと推測される。そのために、「キャリア教育」という新たな教育課題が提示され、職場体験などが盛んに行われている。

しかし、学校を出て職業に就くまでの道のりは、少なくとも未経験の子どもたちにとってはとてつもなく長い。そのための基盤は、子どもたちの発達に応じて地道に形成していくしかないのではないか。

働く動機の第一は、世のため・人のためである。それが進行すると、やがて自分の成長を生み、経済や文化の基盤となる。

竹井学級の子どもたちは、この単純で明白なルートを着実に歩み始めているように思える。それを可能にしたのは、働くことの喜びを素直に表現した資料の力であり、「しなけ

ればならない仕事」と「したほうがいい仕事」を対比した授業構成による。

この結果を見て、竹井さんは「教師に言われて働く受け身」という見方を改めなければならない。あるいは、その壁を授業の力で突き抜けたというべきなのだろうか。

◆加藤実践に寄せて

加藤さんの実践は、ダイアログ（対話）を基本として進行している点に特徴がある。

その舞台は、授業であったり道徳ノートや日記であったりする。間断のない対話を通して、子どもたちの思考は自在に広がる。この広がり、が、「特徴」と「特長」という区分を簡単に超えさせた。

ここで特に注目すべきは、対話がどのような関係において展開されているかという点である。これまで、子どもと教師が対話するのは当然のことであり、授業はそのための営みだと見なされてきた。しかし、レポートからは、子どもどうしの活発な対話が行われていたことを読み取ることができる。そして、実例が示されているように家族との対話も自然に行われている。

授業という営みは、原則として一人の教師と複数の子どもたちによって、いわゆる「集団学習」の体裁をとりながら行われる。しかし、実際には「教師と子ども」というコミュニケーションの糸が子どもの数だけあるということが多く、子どもどうしの糸はあまり想定されていない。これでは、せっかくの集団学習がいかにももったいない。

案外知られていないのだが、“学力世界一”に君臨しているフィンランドは「社会構成主義」という哲学を基盤にしている。これは、

成員相互のコミュニケーションによって新たな価値を生み出すことを意味し、新しい学びの基本型を示している。だから、フィンランドではとくに習熟度別指導を捨てた。なぜなら、「社会構成主義」の立場からは、さまざまな感性の持ち主が共に学ぶほうが生産的だと見なされるからである。

加藤さんがその点を意識していたかどうかは、レポートの範囲からでは読み取れない。しかし、仲間の意見に重ねて新たな発想が生まれるプロセスや、クラスに同名の仲間がいる点にも言及している事例から、子どもたちは相互に強く影響し合っていることは明らかである。

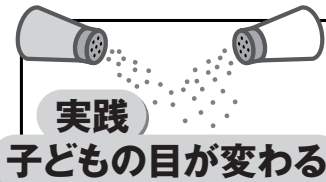
教師一人がどれほど力んだとしても、できることはたかが知れている。もっと子どもたちの相互作用がもたらす生産性に頼っていいのだろうと思う。そう考えるとところから、新たな授業論が生まれる可能性は高い。

その場合に、教師が考えるべきことは、子どもたちの関係を丹念に編み上げていくことと、その関係に投入するテーマの質である。道徳授業の場合は、その後者を資料が担保する。日本が世界に誇るレフティ・中村俊輔は、その存在自体が格好のテーマである。

◆若干のまとめ

国のレベルからの要請は、最大公約数的な底上げに向けられる。しかし、子どもの現実を踏まえ、それを実質化していく作業には現場発の実践情報が欠かせない。その意味において、実践を生み出す現場人の相互交流は不可欠である。

授業の理想像と同じように、実践者相互の交流をもっと活発で生産的なものにしたい。



実践
子どもの目が変わる

授業を変える スパイス Ⅲ



福岡県北九州市立沼小学校校長 立川 修司

1 オリエンテーションの勧め

道徳の授業を見せていただく機会が多くあるのですが、最近、気になることとして、子どもたちがどんな心構えで道徳の授業に臨んでいるのだろうという思いをもちます。

子どもたちは一週間に30時間前後の授業を受けています。その授業の大半は、教科学習で、教師の指導や支援のもと、めあてや課題の解決に向けた学習をしています。単純に言い切ってしまうと、毎時間、解答を求めて学習していることとなります。そうであれば、道徳の時間でも自然と子どもたちの道徳学習に対する心構えが、教科学習と同じになるのもやむを得ないと思います。しかし、それでは道徳の時間の特質を踏まえた学習を行うことはできません。この問題に対処し、生き生きとした道徳授業を行うために、私は〈道徳学習のためのオリエンテーション〉を皆さんにお勧めしています。それぞれの発達段階に応じたことばで、例えば、「のびのびと自分の意見を言ってよい時間」とか、「お話を通してみんなの考えを出し合う時間」とか、「問題の答えを見つけ出す時間ではない」とかいった、オリエンテーションを行うことは、道徳の時間の授業を成立させる大切な要素となると思うのです。

⇒自分なりの工夫でオリエンテーションに挑戦してみてください。

2 ◆◆スパイス その4◆◆

(1～3は前々号と前号参照)

この連載も3回目を迎え、早くも本年度の最後の回となりました。まずは、導入に役立つスパイスを紹介します。

【数を聞いて関心を高める】

一般的には、道徳授業の導入とは、主題に対する児童の興味や関心を高め、ねらいの根底にある

道徳的価値の自覚に向けて動機づけを図る段階であるといわれています。端的に「価値への方向づけ」ということばで表すこともあります。

そこで、授業の導入で、児童のこれまでの経験を尋ねるといった入り方をよく見かけます。しかし、尋ねられる児童の側に立ってみると、ねらいとする道徳的価値に関しての経験を急に聞かれてもなかなか思い出せない子もいて、導入に時間がかかってしまう授業も見られます。そこで、もっと簡単に、数を尋ねるといったスパイスはいかがでしょうか。

内容項目……低・中学年の「信頼友情」

使い時……導入段階

スパイス……発問「あなたの友達は何人ですか？」

こう聞かれた児童は、一生懸命、自分の友達の顔を思い浮かべながら数を数えます。私の実践授業では、5人とか8人とかの発表後、100人と答えた子がいました。私もみんなもびっくりしましたので、「どういう友達かな？」と再度尋ねたら、「クラスのみなんとスポーツクラブや学習塾の仲間を入れると100人くらいになるよ。」と教えてくれました。急に友達の範囲が広がりましたが、納得のいかない顔の児童もいます。教室の空気が友達って何だろうという雰囲気になりました。短い時間で「価値の方向づけ」ができました。このほかにも、

例①／「あなたは今日、どんなあいさつを何回言いましたか。」

「あなたは今日、何人の人とあいさつしましたか。」(礼儀)

例②／「これまでにお世話になった先生は、何人になりますか。」(愛校心)

例③／事前に行ったアンケートの結果の数字を予測させる。「何%だと思いますか。」などの応用パターンも使えます。

⇒ほかにも応用が利きますが、使いすぎないようにしましょう。

3 ◆◆スパイス その5◆◆

次は、終末に使えるスパイスです。「道徳の授業はむずかしい。」という発言の中に、「終末をどうまとめてよいかわからない。」という声も多くあります。確かに道徳の終末は教師の説話が圧倒的に多く、中には、資料の二度出しや教師の価値観の押しつけになってしまった感の説話も見られます。説話ばかりの終末から多様な終末へと変えていきたいですね。

【ピフォー・アフターに気づかせる】

道徳の授業の終わりには、子どもは道徳的価値とのかかわりにおいて自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深めているはずですが、つまり、授業前と授業後には、教科の学習であっても道徳の学習であっても同様に、子どもは何らかの内面的変容が起きているということです。

そこで、授業のねらいに即して、自分は授業前と授業後ではどんな違い（変容）が起きたかを子ども自身に考えさせてはいかががでしょうか。

使い時……授業の終末
対象……中・高学年
スパイス……「授業のはじめのときと今の自分を比べてみましょう。」

「自分の考え（気持ち）の変わったところ・変わらなかったところ」

「友達の意見に賛成できたところ・賛成できなかったところ」

など、自分の変化に視点をあてて、子ども自身に気づかせることで、一人ひとりの「内面的価値の自覚」の深まりを明確化できます。

⇒終末の多様化で、道徳の授業に変化と楽しさを加えましょう。

4 ◆◆スパイス その6◆◆

最後のスパイスは、板書計画についてです。通常、道徳の授業では、縦書きの場合、黒板の右側

から順に左側へと書き進んでいきます。しかし、道徳の授業の流れは多様であり、山あり谷ありのダイナミックであるはずですが、「黒板をステージにしよう」と言われる方もいらっしゃいます。

【黒板の三分割構成法】

このスパイスは、縦書き横書きにかかわらず、黒板を右側・中央・左側と三分割して板書計画を立ててみましょうというものです。

例①／右側を導入、左側を展開、終末を中央に書きます。終末が中央に来るだけでまとめが引き立ちます。

例②／『ぐみの木と小鳥』の場面絵の配置として、右側にぐみの木、左側にりすの家、中央に飛び立つ小鳥を置くと、臨場感が高まります。

例③／対立する意見や登場人物をそれぞれ右側と左側に配置して、その違いや関係を明らかにし、子どもの気持ちや意見を中央に書くと、論点がはっきりします。

⇒三分割で考えると、黒板に「動き」が出てきます。

◆◆「スパイス」一覧表◆◆

立川先生の「授業を変えるスパイス」は、本年度の3号にわたってご執筆いただきました。

ここで前号、前々号で出された「スパイス」をまとめてみます。再度、その味を“ご堪能”いただければ幸いです。（編集部）

<スパイス1>…友達の多様な価値観を知る。

- ・スパイス——ぐるぐる回し
- ・使い時——話し合いの場面

<スパイス2>…うちわ表情絵を持たせる。

- ・スパイス——うちわ表情絵
- ・使い時——動作化の場面

<スパイス3>…手紙を書く活動

■登場人物に宛てて

- ・スパイス——新しい登場人物になって書く。
- ・使い時——終末の段階

■実在の人に宛てて

- ・献立名——尊敬・感謝
- ・スパイス——日ごろ世話になっている人や、日々の生活を支えている人々に書く。

■自分への手紙

- ・スパイス——「自分への手紙」
- ・使い時——道徳の時間の毎時間

道徳の時間を変える③

～授業参観を生かす～



千葉大学准教授 土田 雄一

1 「自己の生き方を考える」ために

92号では「自己評価力」の育成について、93号では、「ウェビングを活用した授業」について提案をしてきた。それらの提案は、何を目指したもののなのか、ここで確認をしたい。今回の学習指導要領の改訂で、道徳の目標に「自己の生き方についての考えを深め」が加わったことは92号で述べたとおりである。これまでは中学校で示されていた「自己の生き方について」が、小学校に降りてきたことに注目したい。

今後、小学校では、「道徳的価値観の形成」だけでなく、「自己の生き方」についても考え、見つける時間としての道徳の時間が求められているのである。

そこで、そのひとつの方法として、「自己評価力」を育てるために、振り返りの手がかりとしての「デジカメで板書を残す」ことや「ウェビングで自己を見つめ直す」授業の提案をしてきたのである。「自分と向き合う力」を育てるための提案である。

2 「保護者と共に考える道徳の授業」の創造を

学習指導要領で、指導内容の重点化が掲げられた。『小学校学習指導要領解説 道徳編』（2008）でも、「全指導内容の重点化」と「教材」や「指導方法」の工夫についても触れられている。その内容の詳細については、ここでは紙幅の関係で割愛するが、例えば、全学年を通じて「自立心や自律性」「生命を尊重する心」の育成について、どのような道徳の時間の指導をするのかを考えなければならぬ。当然、従来のように、道徳1時間だけの指導では十分とは言えない。

そこで、「重点主題」として、「複数時間の指導」のほか、「他の行事や教科と関連させた指導」、さらには、「他の内容項目と関連させた指導」が考

えられる。

例えば、「生命を尊重する心」を育てるためには、内容項目の「生命尊重」を扱うだけでなく、「家族愛」や「個性の伸長」等とも関連させた指導の構想が考えられる。さらに、「授業参観」等で、保護者と共に、誕生の場面を振り返ったり、成長を確認し合ったりすることも効果的である。それらが「自分と向き合う時間」なのである。

このような保護者と共に考える道徳の授業は、児童にとって有効であるだけでなく、保護者にとっても大きな意味をもつ。保護者も子どもの成長を振り返る大切な時間となるからである。そして、授業参観での授業自体が、「共通の教材」として、家族で話し合うことができるからである。

3 「授業参観」を生かす

東京都では、「道徳地区公開講座」が開かれ、保護者だけでなく、地域の方々にも学校で行われている道徳の授業を参観していただいている。

ふだんの授業を公開するのもよいが、実際に、大人と子どもがいっしょに考える道徳の時間があってもよい。

4 「授業参観」を生かす例①

～「家族川柳」を活用する～

光文書院『ゆたかな心』4年生に、「兄は兄、ぼくはぼく」という資料がある。「兄は兄、ぼくはぼくです ちがいます」や「おとうとを しかるときには 母にそっくり」など、兄弟についての川柳と作品に込められた思いが掲載されている。どれも、「ああ、なるほど」「わかるなあ」という作品ばかりだ。発展として、「親子」や「父母」などをテーマとした川柳を作ろうとある。

この資料を生かして、授業参観をすることはできないだろうか。

作品づくりは、国語の時間にし、発表と家族へ

の思いを見つめ直す時間を授業参観の道徳でできないだろうか。保護者にも川柳作りを呼びかけてはいかがだろうか。抵抗がありそうなら、匿名・ペンネームでもよい。子どもたちにとっても、保護者の気持ちを知るよい機会となる。成長を喜ぶ保護者の気持ちが伝わる。また、保護者どうしても、「それって、うちも！」などと共感をよぶことにもなり、保護者会もきっと温かい雰囲気のできるだろう。

関連資料として、筆者の教材開発研究会で作った「家族川柳トランプ」も紹介しながら行うと楽しい。(拙編著「心を育てる創作トランプ」図書文化2007より)

実際に、道徳の授業参観で実践した例もある。千葉県内のある小学校6年生の実践だが、ペンネームによる家族川柳の作品紹介を資料として、「家族について見つめ直す」授業を行っている。「おじいちゃん 仕事のやりすぎ 気をつけて」「電話出て、お母様? と聞かれたよ」「土日はね 会えない父と 久しぶり」等のほか、中には「わかってる 今すぐやるから だまって」「気づけない 兄の優しさ ごめんなさい」のように、6年生の思春期の子どもの心理を表す作品もあった。「家族とは 信頼すること されること」「優しいなあ やっぱり家族は 楽しいなあ」のように家族の温かさ、大切さを再確認する作品もあった。そして、「自分は家族の一員としてどうありたいか」を保護者といっしょに考えることができる実践であった。

このように、保護者も子どもたちも家族を意識する機会が必要ではないか。子どもたちの生活の基盤は家庭である。保護者も子どもたちも、その大切さ、ありがたさをもう一度実感し、見つめ直してほしいのである。

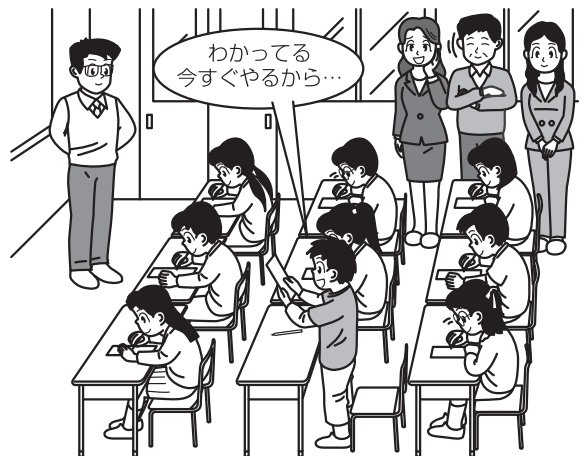
5 「授業参観」を生かす例②

～「一枚の写真から」を活用する～

光文書院『ゆたかな心』5年生に、「一枚の写真から」という資料がある。「小さいころのアルバムの写真」と「今の自分」を比較して、「生きている証拠」として、身体の成長だけでなく、心の成長にも目を向けさせる資料である。

この授業を授業参観で行ってはどうかろう。

成長への思いは、保護者のほうが強い。小さい



ころの記憶は、子どもたちが薄れていても保護者には鮮明なものも少なくない。保護者と共に、自分の成長を見つめ直すのである。実感するのである。

この授業は、5年生でなくても可能である。学年に応じたねらいを設定するとよいが、「小さいころからの成長を実感できる授業」として位置づけ、保護者と共に行うとよいだろう。

この種の授業は全体が温かい雰囲気になる。子どもたちにも保護者にもよい刺激となる授業である。保護者も子どもと共に成長し、育つ時間となつてほしいのである。

6 まとめにかえて

「授業参観を生かした道徳授業」は、自宅での食卓の話題にもなりやすい。授業で話ができなかったことについての会話や、参観できなかった家族もいっしょに考えることが可能であろう。このように、「食卓の話題に上る道徳の授業」が私の提案である。

その他、NHK教育テレビの「道徳ドキュメント」などは、大人が見ても考えさせられる内容のものが多い。ぜひ、保護者と共に考えたいものである。

道徳の時間は、「自己の生き方を考える時間」である。道徳的価値観の形成とともに大切な基盤を育てる時間である。「重点主題」や授業参観・行事を生かして、子どもたちの心に残る実践を積み重ねたい。



千葉県富津市立
大貫小学校

三浦 貴子

豊かな心を育てる 道徳指導

～児童生徒の心を動かす
感動・葛藤資料の開発～



千葉県君津市立
亀山中学校

柴田 克

はじめに

千葉県君津地方教育研究会道徳部会は、今年度57名の部会員数で研究を進めている。例年、年間8回の研究会を開き、千葉大学の土田雄一先生やNHK道徳ドキュメント制作担当の方、道徳の副読本の編集者である岡本弓子先生の講演会や部会員の先生方の日ごろの研究実践報告、授業展開・研究協議会を行っている。今を生きる子どもたちの豊かな心をはぐくむため、道徳で何をすべきか、何を子どもたちに語りかけるべきか、語り合わせるべきか、日々熱く討論している。今回は、その中から1年間のテーマをもち、取り組んでいる実践提案をしたいと思う。

1 小学校実践

「人の生き方に学ぶ道徳授業～命あるかぎり強く生きる～」を1年間のテーマに掲げて道徳の授業を展開している。1年間という長いスパンで子どもたちとともに、【強く生きるとは何か】【今の自分には何ができるのか】【将来の希望・夢は何か】を探っていきたいと考えている。



(1)子どもたちが興味をもつ人材発掘と資料化

興味をもった人物の生き方を子どもたちが調査して、教師とともにそれを資料化する。その人材を『人生モデル』と呼んでいる。本年度これまでの『人生モデル』は次のとおりである。

- 4月 水泳選手 北島康介さん
- 5月 詩人 金子みすゞさん
- 6月 ダウン症 加藤秋雪さん
- 7月 地域を支える人たち
- 9月 オリンピックの選手たち
- 10月 夢を追い続ける大貫小学校の卒業生
- 11月 ソフトボール選手 上野由岐子さん

(2)安心して意見(本音)の言える語り合い

授業の前半は、『人生モデル』の生い立ちや経験・体験を知り、そのときの気持ちを考えたり、自分と比べたりする。後半は、『人生モデル』と出会ってどんなことを教わったのか、これからの自分の人生にどう役立てるのかななどをトーキングサークルで語り合う。教師もその輪に入り、いっしょに意見交換をする。回を重ねるごとに「そうは言うけれど、ほくはそんなに強くなれない。」「でも、乗り越えるときはの勇氣や方法は見つかった。」など、本音がたくさん出てくるようになり、語り合いが盛り上がってきた。

(3)保護者の参観・保護者と語り合う

保護者に授業を参観していただいたり、[鉛筆トーク]と名づけた道徳のワークシートに我が子に向けたメッセージを書いてもらったりしている。親子で生き方を語り合ってくれるよいきっかけになっているようである。これが私の願いでもある。

2 中学校実践

勤務校では「全校道徳」を月1回行っている。小規模校である場合や学級が少人数の場合、あるいは道徳性の低い集団、担任の学級経営が行き詰まっているときなどには有効な方法である。

また道徳の授業は、学級担任が行うのが基本であるが、担任や学級という枠にとらわれず、いろいろな人間性や生き方に触れ、多様な価値観、高い道徳性に触れる意味は大きいと考えて実践している。

(1)歌で道徳

資料を範読する技術にもよろうが、読み物資料以上に歌手の思いを込めた「歌」は心に響いてくるものがある。またそのメロディーは心の琴線に共鳴し、道徳的感情を刺激する。

4月 木山裕策「home」

5月 大野靖之「22歳のひとり言」

6月 アツキヨ「kiseki～もうすぐおこる奇跡を信じて～」

9月 Mr.Children「G I F T」

10月 アンジェラ・アキ「手紙 ～拝啓 十五の君へ～」

以上が今年度これまでに扱った「歌」である。

授業は、その曲にまつわるエピソードや背景を映像や資料で見て、その曲を聴き、感じたことを語り合い、大切な価値に気がつく、という流れで構成する。

最近、民放で「誰も知らない泣ける歌」という番組が始まった。もちろん年度当初、そのような番組が始まることを知るはずもなかった。しかし、そこで紹介される曲の中にも道徳の授業で資料化できるものもたくさんあるように感じる。

(2)資料化の視点

よい資料の要因の一つに「タイムリー性」というものが考えられる。今、だれもが知っている、あるいは話題になっている、興味をもっている、そんな資料は、子どもたちの心に届きやすい資料となる。例えば今年度、4年に一度のオリンピックが開かれた。そこには道徳の授業で扱いたい資料がたくさん存在する。それを来年度に回すのもったいない。余韻さめやらぬうちに資料化し、実践すると効果は大きい。私の場合、9月に「G I F T」という曲をからめて、何人かのアスリートを資料化した。

また、よい資料には「感動」と「葛藤」が必要だと考える。文字の資料からも、もちろん伝わるものも多いが、実際の映像から伝わってくるその人間の生きざまがもつ「力」は大きい。

(3)実践をして ～生徒たちの声～

ここでは、「大野靖之」と「アツキヨ」の授業での生徒の反応を紹介する。

a 「大野靖之・22歳のひとり言」

*歌詞の中の「涙が止まらない」というところで私も涙が出てきました。

*ふだん、なかなか口に出せない言葉だけど、こうして歌の中で聴くと「やっぱり大切なんだなあ」と思うことがたくさんあった。

*親孝行なんて何一つもできていない自分が少し怖くなってきた。

*「眠りにつくときに、生まれてきてよかったと泣けるように生きよう」というところで、涙が出て、自分も悔いのない人生を生きたいと感じた。

b 「アツキヨ・kiseki」

*耳が聞こえないのに歌を歌うなんてほんとうに感動です。「努力」ってすごいなあ。

*7年間も努力し続けたなんてすごい。あきらめないって大切なんだなあって感じた。

*「一度や二度の失敗くらいでうつむいていちゃ何も始まらない」——自分はアツキヨに比べれば、ほんとうに努力が足りないなあと思った。

*アツキヨの存在が奇跡だと思う。人はあきらめなければ奇跡が起きるんだなあと思った。

*何度も投げ出しそうになった清美さん。でもそれを励まし続けたあつしさん。独りではくじけそうになっても支える人がいれば乗り越えられるんだなあと思った。自分も夢をあきらめないとともに、だれかを支えられる人間になりたい。

3 強く生きる

一人ひとりの存在を大切にし、将来に夢と希望を描ける道徳授業を私たちは目指している。人とのつき合いが希薄になり、薄れていくこの社会で何が大切で何が正しいのか、何がほんとうの幸せなのか、子どもたちと大いに語り合う、そんな道徳をこれからも道徳部会の仲間とともに作り上げていく。自分の人生を心豊かに生き抜く子どもの成長を願って。



テレビゲームの悪影響

東京都立梅ヶ丘病院外来医長 大倉 勇史



子どもに対するテレビゲームの悪影響は、今までに何度となく取りざたされている。かつては視力や姿勢が悪くなる、あるいは、社会的不適応や衝動的暴力を引き起こす、などなど。実際、暴力が報奨される（暴力を振るうことによって得点が得られる）テレビゲームをしたあと、ヒトは暴力的になるという研究もあるらしい。これが長期にわたって続くのか？ さらには人格レベルにまで影響するのはいまだ不明とのことである。かつては小説や映画が担った役割をテレビゲームが引き継いだ感があるが、最近はこのような批判は下火になったように思われる。皆、慣れてしまったのか、飽きてしまったのか。しかし、インターネットと融合した昨今、テレビゲームは情報量や速度の観点から質的な変貌を遂げ、さらに大きな影響力をもつに至ったのではなかろうか。暴力のように反社会的な行為に対しては批判や規制があり、その影響を制御しようとする力がはたらきやすい。そのため、影響は異なる場所、違った形で噴出するのではない。

私が思うに、今後テレビゲームの影響は、より一般的な生活、例えば経済活動などに現れるのではないだろうか。ゲームソフトを万引きしたり、代金が欲しくて同僚からお金を巻き上げたり等、直接的な影響ではなくもっと眼に見えにくい、何やら雰囲気のような漠然とした環境の変化、それに知らず知らずのうちに適応してゆく子どもたち。

最近、インターネット上で行われるオンラインゲームにおいて、ゲーム内でしか役に立たない種々のアイテム（道具）が現金で売買されているという話を聞いた。またテレビゲーム内で使用される通貨を貯めるには時間と労力がかかるが、これを代行する会社が設立されたという。バーチャル・リアリティということばがある。日本語では、仮想現実と訳されているが、これは誤訳といわれている。本来は「現実そのものではないが、現実

の本質と効力をもつもの」を意味しているという。お金にたとえれば、実際の貨幣ではないがカードや電子マネーのように現実に使用可能なものをさしている。すなわち、テレビゲーム内で使用される通貨は「仮想」あるいは「虚構」の貨幣であり、決してバーチャルマネーとは呼ばない。しかし、ここで大切なのは定義の問題ではない。問題は“虚構の世界”と“現実の世界”の混同が進行していることである。特に、ゲームという虚構の世界に容易にのめり込むことができる子どもたちが、虚構と現実の境界がわからなくなり、虚構とのかかわりに慣れすぎた結果、虚構から容易に影響を受けてしまうことはないのだろうか。

一方、大人の世界はどうだろう。実は大人もゲームにのめり込んでいる。マネーゲームに興じている。現在の金融危機を見ていると、まず数字の大きさからいって、何やら現実離れしたのを感じる。国家予算にも達する、あるいはそれ以上の金額が電波となって世界中を飛び交う。ところが、その数字にはなんら確たる保証はない。貨幣の価値は国が保証している。しかし、これほど流通する額が巨大になると一国だけでは保証しきれない。各国の協調が必要なきときもある。しかし、それでも保証しきれなかったら。しかも、今の貨幣は国の保護など必要としていない。自らが巨大化することだけを目的に、その目的が達成される場所ならばどこへでも電波に乗って飛んでゆく。保護者のもとを逃れていった放蕩息子。やがては、大きな借金を抱えて戻ってくる。こんな、妄想じみたことを考えていたら、何やら暗い気分になってきた。

いっそのこと、子どもたちに金融市場を任せてしまったらどうだろう。彼らなら、現状を即座にリセットすることに何の躊躇も感じないだろうから。

おおくら・たけし 1978年、千葉大学理学部生物学科を卒業後、教職を経て、1985年、東京医科歯科大学医学部に入学。1991年、同大学を卒業。東京医科歯科大学医学部附属病院精神神経科、恩田第2病院を経て、1998年から現職へ。

心に残るひとこと

筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行



道徳の学習で生命尊重の授業をしたときのことである。話し合いが進み、「命がけ」ということばがキーワードとなった。資料で読んだ、登場人物を命がけで助けようとする人々と、それにこたえて命がけで治療する医師、そしてなんとか助かろうとする本人。それらすべての人々が命を共有し、命がけで生きている。そんな押さえができてはじめていた。子どもたちも、「うん、うん」とうなずきながら話し合っている。そのとき、こうき君がこう言った。

先生、ぼくたちも今、命がけで道徳の勉強をしているよ。

「何を大げさな」とおっしゃるなかれ。私はこのことばを聞いていたく感激した。

話は変わるが、以前、道徳の授業が終わったあと、ゆうき君が「ああ、疲れた～」と言って、机に突っ伏したことがあった。すごいなあと思った。

また、かえでさんが日記に次のようなことを書いてきたことがある。

こんなことを書いたら先生はおこるかもしれないけれど、私は授業中、先生と勝負しています。負けたくありません。

これまた参った。なんとも頼もしい。このこうき君、ゆうき君、かえでさんは私が今担任する学級の子どもたちである。別々の口から発せられた「ひとこと」ではあるが、何か共通するものがありはしないだろうか。

教員は授業で勝負しろ。

これは初任のころから言われ続けたことばであり、私自身そのとおりで思い、日々の実践に心がけている。みなさんにも十分おなじみのことば

であろう。勝負というのは、もちろん毎時間を真剣に取り組めということのたとえである。勝ち負けではない。そこにはお互いがよりよいものを求め合う存在として、目指すものに対しては一切の妥協を許さず、向き合うという緊張感がみなぎる。

かえでさんはそのことを言っているのである。先生から教えてもらうだけの存在ではない。自分も考える一人の人間として、先生よりも先に何かを見つけ出してみせる、と言っているのである。

ゆうき君は、45分間、真剣に考え、資料と、教師と、友達と、自分と向き合ったのである。疲れて当然である。いっさい手を抜かなかった証拠である。そしてそれは心地よい疲れとなるに違いない。

そしてこうき君。授業中いつも真剣に話し合いに参加し、素直な思いを吐露してくれる。その背景にはこんな構えがあったのか。そういえばこうき君は命の学習のあと、自分の生活体験を次のように語ってくれたことがある。

ぼくが事故にあって救急車で運ばれたとき、お母さんが「こうき、こうき」と呼び続けてくれた声が今も耳に残っている。

保護者面談のとき、こうき君のお母さんにこの話をした。お母さんは泣いた。私の心にも深く刻まれた命がけの「ひとこと」であった。

